

お浄土のしおり 善導寺寺報~夏のお盆号

お経にこんな言葉があつたように思います。長い文章を好む人、短い文章を好む人、お人それぞれだと思ひます。幸福に必要な文章の事柄も人それぞれだと思ひます。不完全ですが、ご参考に出来るところがありましたら、役立てて頂ければ幸いです。

善導寺侯雄

巻頭の言葉

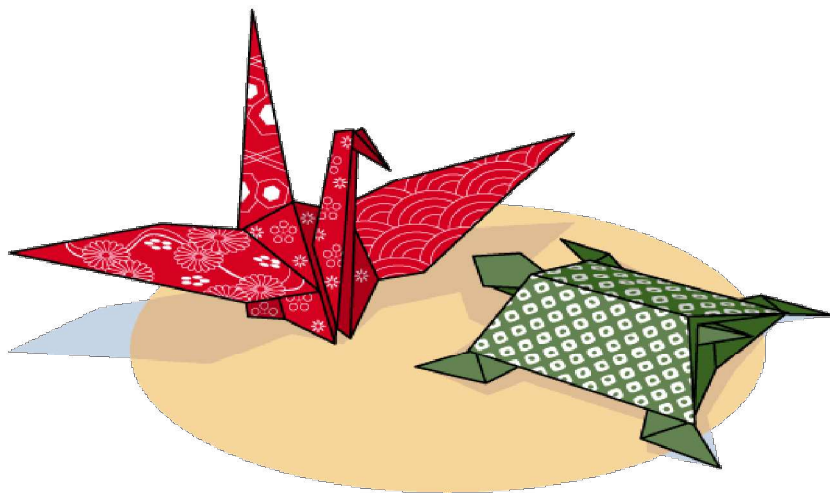
罪をば恐るべし、身をば卑下すべからず 法然上人

私釈

悪い行為は、その結果を恐れて行わないように努めましょう。その上で思わず悪行為を犯してしまったからといって、私は浄土に生まれる資格がないと卑下してはいけません。浄土に生まれるのは善悪の行為ではなく、人を選ばない阿彌陀仏の本願の力によってこそなのであります。(とはいっても好んで悪を為してはいけません)-取意

1. **なぜ、「命というものには、なによりも代え難い最高の価値がある。」という思考が変なのか、もう少し考えてみたいと思ひます。**

もちろん命は大事ですし他のなにかと交換することは出来ません。皆さんと同感です。この瞬間の「命」は、誰にとってもそのほかの何かと代用することは出来ないと思ひます。「命は、何にも代え難い」は、同感です。でも「最高の価値がある」はどうでしょうか?私たちが考える「価値」というものが、くせ者なのだと思います。人間が考える「価値」



というものは、どんなものなのでしょう?

2. **「価値」の上下は、状況によって違うのでは?**

病気の人にとって、その病気を治すための薬や治療は価値があります。毒ヘビに咬まれて、ほっておくと命を失うかも知れない状況になった人にとっては、その毒を消す「血清剤」は、「最高の価値」があるはずで、(その状況を知った周りの人も、その毒に効く「血清剤」をなるべく速く用意すべきだと思ひましょう。)しかし、毒ヘビに咬まれていない普通の健康な人にとって、その「血清剤」は「最

高の価値」とは言えません。言えないどころか、「何の価値も」ありません。ダイヤモンドは、世間では価値があるものとされていますが、幼児にとっては、お父さんやお母さんの「やさしい声」の方がよほど価値があるに決まっています。何もかもに絶望して、生き甲斐を感じなくなってしまった人にとっては、「生き甲斐」がみつければ、それが「最高の価値」といえると思ひます。しかし、生き甲斐を見いだして、生き生きとしている人にとっては、「最高の価値」になる物事は、違うと思ひます。(ちなみに仏教だと、その幸福～喜び～を他の人に分け与える行為が最高の価値がある、と云っていると思ひられます)この様に、私たちが感じる「最高の価値ある物事」というのは、私たち個人個人の状況によって、色々変わるものではないでしょうか?

3. **「命」は、状況に関係ない**

でも、「命」そのものは、状況によって変化しません。どんな状況の下でも、生きているなら、その人にとって、同じ「命」なのではないでしょうか。私たちが「価値」を感じる物事は、ある状況に応じた物事であって、その状況に応じて「最高の価値あるものごと」は、色々違って来るはずだと思ひます。「命そのもの」に価値付けが出来るのでしょうか?

4. **人間の推量は、かなりデタラメなのでは?**

人間が物事に「価値」をつける、というのは、その物事がどんなものであるか、「推し量って知る」ことが出来た時だけなのでは、と思ひます。加えて人間が「推し量って知る」ということも、随分でたらめな事があります。ダイヤモンドは高価ですが、ただの炭素の結

晶です。ただきれいでも結構変化しないように見えるので、高価な値段でやりとりされますが、先述のように赤ちゃんにとっては何の価値もないと思います。こんな調子の「価値」も現実には私たちの心の中に出てくるんですから、人間の「価値付け」という行為は、かなり限定された条件の範囲でなされることが殆どなのではないでしょうか？

ダイヤモンドは、高額な貨幣のかわりに手に入るから、綺麗であまり変化しないから、価値があると考えられているだけです。普遍的な価値があるのなら、宝石商の方方は、何故、それを人に売ってなるべく手放そうとするのですか？金塊に普遍的な価値があるのなら、金を沢山採る行為をしている人が、一番幸福であるはずですが、その方方は、その行為を職業にして、やはり金よりも給料を選びます。綺麗であまり変化しない宝石がお好きなご婦人方も、それに普遍的な価値をみだしているのなら、何故、食物や衣服もすべて宝石にしないのでしょうか？価値というのは、ある条件の範囲の中でしか通用しない、というのは明白ですよ。

5、**仏教の行為論**

仏教は、生きとし生けるものが「苦しみ」から綺麗さっぱり縁を切る事のための行為に、「価値」を置くのだと思います。「苦しみ」から縁を切る事を「解脱」といいます。「解脱」というのは、ある束縛から「解き離れた」事を意味します。「やらなくてはならないこと」を「やり終えて」、「ほっとした」状態の事だとも言われます。わかりやすい例を云えば、学生さんが、「宿題」を課せられたとします。その「宿題」をやって、翌日先生に提出して、「認可」をもらう、この行為によって、「宿題」という「しなくてはならないこと」から「解き放たれた」のです。学生さんはちょっと「ホッ」とするでしょう？

この状態が、大変小さいほんのちょっとした事ですが、「(その宿題からの)解脱」なのだと言明する方もいらっしゃいます。とても解りやすいたとえだとも思います。生きてると、色々な「生きていてはならないこと」が場面場面で次々に出てきますが、それらを一つ一つ正しく完了していくこと(これが大きな課題だと思います)が、「解脱」につながる行為なのだとも思います。

6、**倫理・道徳が完璧になしとげられれば、解脱に至る、と言われます。これは、仏教だけの見解です。**

だから、完璧に「生きているものとしての倫理・道徳」を完了すれば、「悟り」であり「解脱」なのです。お釈迦様は、「生命あるもの」として、道徳上、完璧にその心が成長したならば、それが「解脱」であり「涅槃」につながるとおっしゃっているのです。そのための正しい見方考え方と、行為が説かれたのが仏教なのです。これが、「四諦(四つの聖なる真理)」と「八正道(八つの正しい行いの道)」なのです。まず、わたしたちは、この仏教観をおさえおきたいものです。お釈迦様が奨めたことは、最高の事ですが、それは、時代・社会がどう変わろうとも、毎日の日常のあたりまえの生活の中にあるのです。

7、**余談・オウム事件**

余談ですが、世を騒がせた「オウム事件」のはなしは、お話にならないほどおかしな話です。なにからなにまで完璧に、といたいほどあべこべな思考です。もうお解りだと思えます。「オウム事件を引き起こした人々」は、何をめざしていたのでしょうか？という如きの議論が出てきたら、それは完璧に時間の無駄です。ただ、「誤った思考に負けて心をかなり墮落させて、法律にふれる重い過ちを犯しただけ」です。

8、**善行為だけになったとしても、「生きています」。「生きていること」と「悪行為を犯してしまうこと」は別々の話です。**

前回に、こう書きました。「私たちは、完璧ではありませんから生きていけば不注意から過ちを犯すこともあります。」と。少なくとも、私はそうです。しかし、私のように、生きていて「不注意から過ちを犯すこと」だらけでも、生きている 間違いを犯す。の順序を取り違えて、心の中で「このくらいの悪いこともしなければ、私は生きていけない」と決めてかかってしまう思考や感情を持ってしまう事は避けたいと思います。このような事を皆様に向かって堂々と言えるような人間ではありませんが、私ではなくて、仏教はこのように示しているのです。「このくらいの悪いこともしなければ、私は生きていけない」という思考は全くおかしいです、と。そしてこの思いにエサをあたえつづけているのが、「生きていることは最高の価値のある偉いことである」という、考えすぎの思考なのだとも思います。

善行為を完璧にしても、何の困る事もなくきちんと生きていけるはずで、という見解は、とても大事だと思います。これがあるから、今より向上しよう、幸福になろう、と思うことも成り立つのではないのでしょうか？

9、**仏陀がすすめる善行為**

お釈迦様が奨めた「善い行為」というのは、どんな事でしょうか？生きていれば、行為の連続ですが、まず、何かをしようと思ったとき、

1 それは(その行為は)自分の為になるか

2 それは(その行為は)行為する相手のためになるか

3 それは(その行為は)すべての生き物のためになるか

この3つが満たされるならば、それは善行為だから行いなさい。という教えがあります。一定の時間を必要とする大まかな行為から、瞬間瞬間のきめ細かい行為まであてはまるので、大変真剣な生き方をする必要があります、と受け止めるとともに、「とても自分には出来ていない」と思ってしまうのですが、これこそ、仏陀が、**正直で聡明で善を行う能力のあふれた善い人に対して**奨めている「人間の生き方」なのだと思います。

これを間違いなくするのは大変なことです。が、**灰色かもしれませんが、一つ一つでも向上するように大事に生きていきたいものです。**

悪人を救う浄土教を発見した法然上人も、「罪をいえば十悪五逆～この言葉の意味は、のちにまわします。人の心が墮落する最悪行為の事です～を犯した者でも、阿弥陀様の本願の力添えによってやすやすと浄土に生まれる、と信賴して、少罪～かすかな罪～をも犯すまいと思ふべきです。」とおっしゃっています。(完璧に出来るか出来ないかは別としても...このことをどう思ったらいいかは、納得できる答えがきちんと伝わっているのですが、紙面の関係で後にふれます。)

10、**善行為を完璧に為しても生命が成り立つ証拠**

善行為を完璧に為しても生命が生きることが成り立つ、という見解は正しいと思います。証拠はたくさんあります。

お釈迦様がこの世界にいらっしゃった時、お弟子さんたちは、完璧に道德・倫理を実行しおわって、「阿羅漢」(原語 arhat; **まさに供養**

すべき人という意味です)と呼ばれた方は沢山いらっしゃったと經典によって伝えられています。涅槃に至った、すべての苦しみから解放された(解脱なされた)方方です。どなたもお身体があり、清らかなご生活をしていたと拝察します。その方方の「苦しみから完璧に解放された境地」の喜びを語る言葉のなかによく出てくるのが、「**なすべきことは為し終わりました**」という言葉です。漢訳では「**所作皆弁**～所作、皆な弁ず～」、「**所作已弁**～所作、已に弁ず～」と表現されている言葉です。

これは、「**なすべきことをなしおえた**」という意味で、殆どのお経の冒頭に、お釈迦様のお弟子さんの中で、涅槃に至った阿羅漢の方方を形容して述べられています。

何を為し終わったのですかということ、それは、「**生命として為すべき倫理、道徳行為**」を為し終わった方方なのです。だから、「生きる条件に悪行為は入らない」という見解が正しいと思います。(実際の私たちの行為の善悪の程はともあれ。)

11、**どうかんがえても、「命」の価値付けはしっくりこないのではないのでしょうか。**

善行為のみしていても生命ですし、悪行為のみしているとしても、生命のほうです。ここでいう「善悪の行為」というのは、**そうしようという意志をもった行為**、という意味です。

生きているものにとって、「命そのもの」は推し量り難いもので、誰にとっても「命」だけは価値づけ以前の土台と考えるべきなのではないのでしょうか？

12、**自分の心でさえ自由にならない、この現実。**

とはいえ、私たちは「生きている」という事の現実の様子に完璧には気づいておらず、自分の心さえ自由にならず、自分の心に振り回される不自由を感じます。

13、**「生きている」ことに対する酔い**

人間は「生きている」ということに酔っていると仏教は指摘するのです。「生きているという事には最高の価値がある」という考えすぎの思考は、この「酔い」に関係するのではないのでしょうか？

たとえば、南方の仏教は、「生きている」ということに酔っている事、この思考、感覚をやめる方法までお釈迦様は説いておられますと紹介しています。不完全ながらも、見学してみましよう。

14、酔いから醒める方法は?

それは、「私は死ぬものであり、死という性質を乗り越えてはいない」という観察、思いなのです。

この思考の上で生きれば、「生きていることに対する酔いが無くなる。無くならない場合は薄くなる。」とお釈迦様はおっしゃいます。そうすると気持ちが落ち着いて、悪行為をしなくなる、幸福の原因となる行為をすることが多くなってくるのだといわれます。何故なら、この一生は、一度だけだから、とても大事に思えてくるし、「この今という時」は二度と来ないから、なるべく丁寧に行為しようと思ってくるからだと思います。

15、生きること自体は生きる指針にはなりません

敬うべきお坊様の言葉を引用すれば、「生きることはモットーになりません。なぜならいつか死ぬからです」といわれます。「生きることをモットーとする」ということは、「生きることに最高の価値付けをする」ということです。これは、成り立ちません。いいかえれば、ふつう私たちは善行為も悪行為もひっくるめてやっていて「生きている」のですから、善行為も悪行為もひっくるめて「最高の価値がある」となってしまうのです。

16、事実にとつた指針を

「私の本質は死ぬことであり、死という性質を乗り越えてはいません(乗り越えてはいませんが、避けては通れません、という意味です)」という思考パターンが本当によく心に定着すれば、本当に身も心も軽やかに、活発に人のために行なわなければ、もったいない、と思えてくるといわれます。だって、「わたし」の命には限りがあると了解するのですから。この事は、事実でしょう?死なない人はいません。私たちは「死」に向かって生きています。「それは嘘の説です。」という人が居たら、これこそ正真正銘の嘘です。「知る」という活動が出来るのが「生き物」ですが、知るならば「真実」を知りたい、というのが、命あるものの偽らざる気持ちだと思います。「偽り」に欺かれて、意外な結果に驚くのは、嫌ですものね。心が落ち着きません。事実を知ればこそ、的外れの無い対処法を気持ちを落ち着けて考えられる筈です。これは、何にでもあてはまると思います。にもかかわらず、日常の生活上は「事実」をかく

して振る舞おうとすることもあるのですから、わたしたちの「心」は厄介ですね。



17、「常に観察しておくべき五つの事柄」

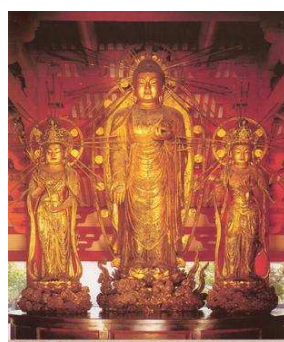
この「私は死ぬものであり、死という性質を乗り越えてはいない」という観察、思いは、

「常に観察しておくべき五つの事柄」として、古代インド語のお経(パーリー語の仏典)に紹介されている経説のうちの一つです。その五つの事柄というのは、

- 1 私は老いるものであり、老いという性質を乗り越えていません。
- 2 私は病気になるものであり、病気という性質を乗り越えていません。
- 3 私は死ぬものであり、死という性質を乗り越えてはいません。
- 4 私の好きなものはすべて変化し、離れていくものです。
- 5 私は業で作られ、業を相続し、業から生まれ、業を親族とし、業に依存している。私の行為の結果は、善いことであれ悪いことであれ、私が受けます。というものです。

これが、仏陀がすすめる人間が持つべき「生きるうえでのモットー」・「私はこの路線で頑張っている」という「生きる指針」なのです。詳しくは、「常に観察しておくべき五つの事柄」と題した、テラヴァーダ協会さんの施本がありますので、必要な旨をお知らせ頂ければ、おわけします。ここのところは、全体的にその施本の文章をお借りしたものです。(わたしは、南方仏教の実践を教わったことはありませんので)仏教的な考え方を知ることとても参考になると思います。PDF形式の電子ファイルなので、いくらでも印刷できますので、気軽に頼んで下さって結構です。

18、仏陀は真理を語る人



このような教説は仏教にしかありません。「正しく事実を知った人」は、お釈迦様だけです。だから「仏陀(知った人・目ざめた人)と云われるのです。これが、仏教徒の思考です。だから、仏教徒は

仏陀を頼りにするのです。
この寺報では、仏陀がかたったのは事実真理か、という事を、ご一緒にこれからたしかめてみようとする事でもあります。
なぜなら、お釈迦様ご自身がこのようなお言葉をおっしゃっているのですから。
「わたし自身の事・わたしの言っていることは、鵜呑みに信じる前に、確かめてください。そうでないと、何の利益にもなりませんよ。」と。

19、浄土宗の指標～お念仏の生活

浄土宗でいう「お念仏の生活」も、自然にこういうような「生きる指針」になるようになっていくと思うのです。

1「求める所」は、極楽世界といわれる阿彌陀仏の清浄な仏国土。(これを「所求」といいます)

2「帰する人」(頼りにする人)は、大慈悲の阿彌陀仏。(これを「所歸」といいます)

3「極楽世界に生まれる(往生する～心が成長してそこに生まれる～)行為」は、「南無阿彌陀仏」と仏陀の御名を呼ぶ「称名念仏」。(これを「去行」といいます)

上に記したように、阿彌陀仏の本願の力を信頼して、本願の念仏であります「南無阿彌陀仏」を唱えて、この世界を厭い離れて極楽世界を願い求め、佛菩薩の尊い方々の来迎を頼んで、往生という結果を得ます、という指標です。

20、もし、熱心なお念仏の人が「五つの事柄」を聞いたら、どう思うでしょう?

この指標にそつて、先ほどの五つの事柄を観ますと、信仰・感情の上では、たとえば(あくまでも、たとえば、ですが)このようになるでしょう。

1 私は老いるものであり、老いという性質を乗り越えていません。

-たしかにそうだと思います。私の場合は老いは楽しいです。何故なら、年をかさねるほど極楽世界に近づいているからです。

2 私は病気になるものであり、病気という性質を乗り越えていません。

-たしかにそうだと思います。私の場合は病にかかればひそかにこれを楽しみます。なぜなら、この病によって死にいたるなら、往生

がすぐそこになりますから待ち遠しいです。この病がなおれば、又念仏にいそしむことができます。これも嬉しいことです。

3 私は死ぬものであり、死という性質を乗り越えてはいません。

-たしかにそうだと思います。私の場合は死を往生の時ととらえて、気楽に受け入れます。言うまでもなく、臨終に佛菩薩の聖衆の来迎を蒙り、その祐けによって心が落ち着くからです。いよいよという時に～死に臨んでいるときに「臨終」で、「死」ではありません～来迎を蒙り、仏・菩薩の方々のえもいわれぬお姿を見立てまつり、慈悲のお心に触れて、心が落ち着いて、ひと思いの時節に命終し、次のひとおもいの時節に極楽世界に生まれるのは、みな佛力によります。だからすべて、仏様にお任せしますという楽な気持ちになります。

4 私の好きなものはすべて変化し、離れていくものです。

-たしかにそうだと思います。私の場合はこの世界の物事に異常に依存すると大変です。私の体でさえも、変化し私から離れていきます。まして、家族・親族・財産をや。家族親族は愛すべき、仲良くすべき、お互いに心配すべき存在ですが、異常に依存すべきではありません。このご縁はこの世のみならず、いつか浄土での再会によって永世に続きます。同じ浄土の信をもっていればすぐに、そうでなくてもいずれ浄土で再会できます。(この事も後の詳説にさせて下さい)財産もいずれは手放すものです。だから財産はこの世界で、最も有効に力を発揮するように使う道具にすぎません。だから、冷静になり心落ち着き、よりの確な使い方が出来るようになります。

5 私は業で作られ、業を相続し、業から生まれ、業を親族とし、業に依存している。私の行為の結果は、善いことであれ悪いことであれ、私が受ける。

-たしかにそのような気がします。でも私はこう思います。このことは、仏陀にしか完全に理解できない、生命の行く末の法則です。仏陀によれば、往生の業は、何より「念佛」を先とします。これが、法然上人が発見された、お釈迦様の極楽往生についての教え。経説、業論です。

21、**「念死念仏」～むずかしい、特別な話ではありません。**

又、浄土宗のこういうことに関係する言葉では**「念死念仏」という言葉があります。「死を忘れず、慈しみある阿弥陀仏を忘れず」という意味です。**

そんなにむずかしい変な事ではありません。

「念死」というのは、まずは**「わたしの人生にはいつかはわからないけれど終わりがあります。」**ということを頭においておくことによって、「今、お念仏しているこの今という時だけ現実に把握しています。先のことはわかりません」というぐらいのことだと思います。お念仏していると、自然にこのような状態になっているのに気づくことがあります。これは「確かめ」の一つだと思います。おおらかにお念仏を唱えていて、阿弥陀様に「南無阿弥陀仏」と呼びかける以外の変な思いが出てきても、それも「この今のそらごとの妄念。そのまま気にしないで放っておきましょう」という事なのです。

それと、「念仏」というのは**「慈しみある仏様を思慕して会いたい(仏様のおわす世界に生まれたい)と思って仏さまのことを忘れない」という意味でもあります。**

22、**浄土宗の実践は超具体的。その理由・いわれは、とても大きく、深いです。**

その具体的な方法は、「南無阿弥陀仏」のお念仏をおおらかに只申すことです。喜んで申せるようになること(特に臨終に)を目指せば善いと思います。

浄土宗の教えのこの理由、根拠、いわれについては、未聞の道理がありますので、次号から少しづつお伝えしようと思っています。

又、なぜ仏教全般を学ぶのに上座部仏教をよく参考にするのか、そのメリットや、どう上座部の教えを受け止めたらよいのかという事、「宗」ということについても、書くべきだと思っています。

それから、浄土宗乃至浄土教でも、「心遣いのありさま・方法」というあまたの事が、よくよく説かれています。ありとあらゆる疑念に関して、答えが必ずあるはずです。この疑念は、お人によってさまざまでしょうし、ご法事のあとの限られた時間では、取り上げることも不可能に近いので、少しずつご参考までに、お伝えさせていただきます。

お知らせ

夏のお盆・お施餓鬼がもうすぐです。別紙のご案内に基づいて、お参り下さい。

寺院駐車場が広くなりますよう、ただいま工事中です。以前より12～3台程多く駐車できると思っています。それでもお昼前後は混み合うことが予想されますので、可能でしたら時間差を考慮して、お参りください。

善導寺での催しご案内 平成24年度

毎月第一土曜日午後二時～三時半 写経と写仏の会～写経写仏の功德は、心が落ち着くなど色々あると思います。よろしかったらどうぞ。

毎月第二土曜日午後二時～三時半 仏教・浄土宗を学ぶ会

毎月第三土曜日午後二時～三時 詠唱の集い
歌を通して法然上人の世界に触れることが出来ます
歌の好きな方は、出席なさってみても損はありません。

毎月第四土曜日午後二時～三時半 お念仏の会
於;本堂

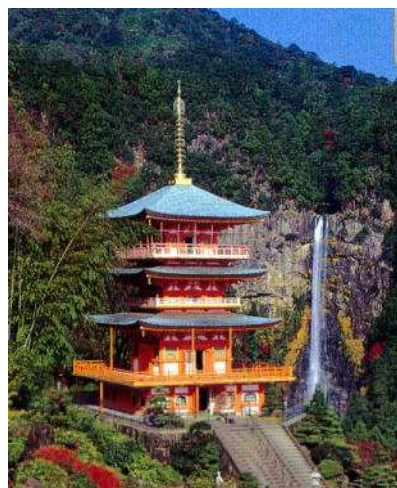
正式には「別時念仏会(べつじねんぶつえ)」と云います。呼べば答える阿弥陀様とのひとときです。

いずれも動きやすい、気候に合った服装でご出席下さい。ただ、お袈裟(輪袈裟～「わけさ」と云います)とお数珠を持っている方は、ご持参下さい。(無くても大丈夫です)

毎月の集いは、住職、出席の方々のご都合・ご希望に合わせて次の回がお休みになる事もありますが、知らなくていらっしゃっても、無駄な時間にならないように、写経や法話DVD鑑賞や、法話CD等が聞けるようにしています。

休憩時間には、茶菓のご用意がありますが、セルフサービスでお願いします。

興味のある集いがあったら、お気軽にお越し下さい。



青岸渡寺と那智の滝